

その答え、納得できますか？ —論理の一貫性と発想の柔軟性—

横浜経営学会 会長 大雄 智

経営学部新入生ならびに大学院国際社会科学府経営学専攻新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。横浜経営学会会員一同、皆さんを心より歓迎いたします。学会とは、大雑把に言うと、研究者・学者による研究成果の発表や専門知識の普及を目的とする組織です。おそらくこれから皆さんは、折に触れて、研究と勉強は違うという趣旨の話を先生方から聞くことになると思います。大学・大学院への入学を選択し、研究・学問の入り口に立とうとしている皆さんにとって、そうした話はもちろん大切です。しかしここでは、これからもさまざまな選択に直面し、できるだけ良い選択をしたいと思うであろう皆さんに向けて、大学という場で学ぶことの意義をお話したいと思います。

そもそも良い選択とは何でしょうか。個人の選択であれ企業の選択であれ、その良し悪しをどのように評価したらよいのでしょうか。大学で学ぶことにより、そのような問い合わせに対する納得できる答えを手に入れられるのでしょうか。ここで、選択の良し悪しを評価する一つの拠り所として、経済合理性というものを取り上げてみましょう。もしも、学部新入生の皆さんの中に、大学への進学を選択するにあたり、コスト（入学金・授業料等の学費および仮に高校卒業後すぐに就職したとしたら得られるであろう4年間の賃金）とベネフィット（高校卒業後すぐに就職せずに、大学に進学することによって得られるであろう生涯賃金の増加分）を見積もったうえで論理的に判断した人がいたとしたら、その人は経済合理性に依拠して選択したといえます。大学への進学を投資とみて、そこから期待されるリターンの大きさで、その選択の良し悪しを評価しようという考え方です。

企業が選択する投資プロジェクトは、まさに経済合理性に依拠してその良し悪しが評価されますが、問題は、それによって納得できる答えが得られるかどうかです。さんは、これから受ける授業のなかで、正味現在価値法、内部収益率法、回収期間法といった投資評価基準を学習するはずです。紙幅の都合上、それぞれの意味をここで説明することはできませんが、評価基準が複数存在することは、単一で普遍的な拠り所があるわけではないことを示唆しています。つまり、いつも、どこでも、どのような状況でも正味現在価値法に基づいて投資プロジェクトを選択すれば「正解」というわけではなさそうなのです。大学で学ぶ皆さんにとって大切なのは、答えは一つであると思い込まない姿勢です。むしろ、前提と仮定によって答えが変わりうることを視野に入れ、その前提と仮定を、現実の状況、コンテキストに照らして問い合わせ直してみることが肝要です。

また、個人であれ企業であれ、選択肢のうち何を選び取り、何を捨てるかを決めるときには、そもそもどのような選択肢がありうるのか、その可能性も考えることになるはずです。試験問題のように事前に選択肢が与えられていれば、その範囲で、論理的に一貫性のある選択ができればそれでよいでしょう。しかし現実には、自分で選択肢を立てなければならず、そこでは大抵、後から振り返って、あのときどうして思いつかなかったのだろうという選択肢があるものです。自分の選択肢を広げたり絞ったりするうえでは、しばしば、視点の転換や発想の飛躍が求められますが、それを促進するのが

他者との相互作用です。そしてまさにそこに、大学で学ぶ意義があると私は考えます。たとえばゼミナール（演習）は、皆さんのが他者（先生、同期のメンバーなど）との対話と議論を重ねながら、自分の選択肢（問い合わせ）を展開したり分解したりする場です。

良い選択とは何か、良い選択をするためにはどうしたらよいか、こうした問い合わせに明確に答えることは残念ながらできませんが、論理の一貫性と発想の柔軟性は、皆さんのが納得できる選択（答え）に至るための鍵です。大学では、答えは一つと決めてかかることなく、異なるものの見方との交わりを楽しむことをおすすめします。その過程で、自分のことがよくわかってくるかもしれません。たとえば、前述の経済合理性の考え方方が腑に落ちなかった人は、わかったふりをせずに、どこに違和感を覚えたのか、どこまでは受け入れられそうか、ぜひ考えてみてください。駄然としないものが残ってもかまいません。経営学では、さまざまなものを見方、考え方、攻め方を学ぶことができます。そのなかで自分にしつくりくるものを徐々に深く掘り下げていくとよいでしょう。

私たちは、皆さんのが自ら問い合わせを立て、考え、納得できる答えを見出すことを心から応援しています。この『経営学会ニュース』には、先生方の研究紹介、先輩から皆さんへのメッセージ、「横浜経営学会賞」（賞金は最優秀賞10万円、優秀賞5万円）入賞作品の要旨などが掲載されています。また、学会誌である『横浜経営研究』では、先生方の最新の論文、著名な経営者・研究者を講師としてお招きする「横浜経営学会講演会」の講演録などが掲載されています。とりわけ論文を読むときには、そこに唯一の正解が書かれていると思わず、著者の論理と発想が論文の型に沿って表現されているととらえ、それらをよく吟味してみましょう。研究への扉は開かれています。ぜひ臆せずに挑戦してください。